

東西南北

2018.12.23

もしも自分が誰かのクローン人間としたら……。長崎市出身のノーベル賞作家カズオ・イシグロ氏の小説「わたしを離さないで」は、近未来的な世界を描いている▼映画化された作品は、美しい映像とともに愁いを帯びたストーリーが展開する。「本体」である人間の命に、胸が締め付けられる▼しばらく姿を見せなかつたナイジェリア大統領が久しぶりに現れたとき、クローンではないかというわきが広まった。慌てて「わたしはクローンではない」とツイッターで反論した。笑い話のような実話がネットなどで話題となった。それだけクローンに現実味があるということか▼こちらは笑えない話。中国の科学者が人の受精卵を、ゲノム編集技術を使って改変し、双子を誕生させたと主張した。真偽は定かではないが、倫理を無視した「人体実験」と、厳しい批判が集まっている▼クローン問題は極端なケースだが、仮想通貨やキャッシュレス決済、自動運転など、実感の伴わないやりとりが広まりつつある。スピーディーで手間も省けるが、その便利さは心もとなさそうと表裏でもある▼クローンが回るような世の中が、簡単に訪れるとも思えないが、科学が現実を脅かす側面は気掛かりだ。人のありようの確かさとか、地に足のついた生活の実感は失いたくない。技術と同時に、それを補う哲学こそ進化が必要かもしれない。

(2018年12月23日付朝刊1面)

① このコラムの筆者が強く大事にしたいと考えていることは何でしょうか。二つ抜き出してください。

人のありようの確かさ、地に足の付いた生活の実感

② コラムにある「実感の伴わないやりとり」の身近な例を、記事にあること以外で書いてみましょう。

まったく知らない人との SNS 上の会話、スマホゲームで得られるアバターなどいろいろ考えられます。

③ 技術と哲学はどう両立させていけばいいのでしょうか。小さなことでもいいので、何か提案を考えてみましょう。

解答は無限にありますが、技術を生んで使うのも哲学を考えるのも人だという視点は大切にしたいですね。